

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580008

研究課題名(和文)中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究

研究課題名(英文)To realize the metrology study on the Confucian vocabularies

研究代表者

渡辺 義浩 (WATANABE, Yoshihiro)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40241400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究を実現するため、唐代に道世が著した仏教典籍『法苑珠林』における東晉の干宝の『捜神記』の引用事例を調査した。本研究では、計量学的研究の前提となる両者の関係を明らかにし得た。『法苑珠林』の編者である道世が、仏教的宇宙観を展開した際に、その対峙性において、最も意識したものは『捜神記』であった。それは、『捜神記』が、数多くの変化を記録すると共に、それらの原理を追求する「五気变化論」という理論を有していたことによる。『成唯識論』を訳した玄奘の影響を受けた道世は、唯識思想により干宝の五気变化論を打破することで、仏教の優位性を明確に示したのである。

研究成果の概要(英文)：To realize the metrology study on the Confucian vocabularies which were used in Chinese Buddhist scriptures, I have researched the cases of quotation from "Soushenji" which was written by Ganbao in Dongjin dynasty in Buddhist writing "Fayuanzhulin" which was written by Daoshi in Tang dynasty. On this research, I have disclosed the relation between "Soushenji" and "Fayuanzhulin" which is the premise of metrology study. When Daoshi who edited "Fayuanzhulin" used Buddhist view of the cosmos, he was most conscious of "Soushenji" in the difference of them, for "Soushenji" recorded a lot of changes and had the theory Wuqibianhualun which pursued those principles. Daoshi who was influenced by the translator of Chengweishilun Xuanzhuang criticized Ganbao's theory Wuqibianhualun by the thought Weishi and declared Buddhist superiority.

研究分野：中国古代思想史

キーワード：儒教 仏教 『法苑珠林』 『捜神記』

1. 研究開始当初の背景

西晋末期から東晋にかけて中国で流行した仏教は、格義仏教と呼ばれる。中国における仏教受容の初期段階に、インド仏教の原典に即して直接その原義を研究するのではなく、独自の文化基盤をもつ全く異種の言語体系に変換された漢訳仏典に全面的に依拠しつつ、思想類型の異なる中国古典との類比において仏教を理解しようとするものが、格義仏教である。たとえば、西晋末の竺法雅は豊かな中国古典の教養を活用して仏教に暗い知識人を教導し、格義仏教の端緒を開き、東晋の支遁は、般若系統の仏典を研究し、般若の「空」の思想を老荘の「無」の思想に置き換えることにより、仏教の普及に大きな役割を果たしたと言われる。その背景として挙げられるものは、西晋における儒教の衰退と老荘思想の発展、という通俗的な理解である。

渡邊義浩「浮き草の貴公子 何晏」で明らかにしたように、玄学の創始者とされる曹魏の何晏は、その主著が『論語集解』であるように、儒教の幅広い思想の上に老荘思想を再編している。諸子百家時代の老荘とは異なり、玄学から始まる六朝の老荘思想は、儒教の圧倒的な影響下にあるのである。また、渡邊義浩「郭象の『莊子』注と貴族制」で明らかにしたように、『莊子』の注として現在も読み継がれている東晋の郭象の「無」の位置づけは、儒教の天人相関説の天子と天との関係を「有」と「無」に準えて「無」から「有」が生ずるといふ『莊子』本来の「無」の理解を否定するものであった。諸子百家時代の『莊子』の解釈を否定する郭象の注が、東晋、さらには現在に至るまで『莊子』解釈の決定版として受け継がれてきたのは、西晋「儒教国家」のもと、ほとんどの知識人に身体化されていた儒教が、郭象の儒教に引きつけた『莊子』解釈を矛盾なく理解させたためである。

したがって、従来のごとく、老荘思想のみから格義仏教を捉えることは時代の本質を見誤る可能性がある。仏教に対する儒教の影響を解明する必要性の理由である。

以上のような問題意識に基づき、昨年度の挑戦的萌芽研究に申請したが、採択されなかった。そこで、早稲田大学の特定課題として仏教經典に現れた儒教語彙の予備的な研究を進めたところ、扱う問題が大き過ぎたことに気がついた。また、今年、早稲田大学で開催した日本仏教学会において、仏教研究者と交流したところ、仏道の論争を儒教的な民族概念から分析する方法が有効であるとの示唆を受けた。

2. 研究の目的

中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究を実現するため、その対象を選定し、その内容を理解することに努めた。

これまでの研究方法と問題意識を継承し

ながらも、今回は、儒教における民族概念の展開に焦点を絞り、漢代までは夷狄に対して中華と称していた中国の華夷概念が、夷狄を胡、中華を漢と称するに至る過程を仏道の論争を分析することで追求する。

本研究は、近年、急速に進んだデータベースの構築を受けて、それを利用した計量学的分析を試みることに学術的な特徴がある。老荘思想の影に隠れていた儒教の規制力を語彙より解明していく研究は、これまでに皆無であり、それを試みることに意義がある。

3. 研究の方法

仏教学は、中国学と比較して、コンピュータの導入に一日の長がある。その象徴は、S A T (大正新脩大藏經テキストデータベース)であろう。『大正新脩大藏經』は出版以来、仏教学研究の国際標準典拠として国内外で広く用いられてきている。それを典拠についての信頼性の確保しながらデータ化したものがS A Tで、無料で広く公開されている。さらに、S A T 2012では、「本文(および大正新脩大藏經の脚注)」「検索機能」「他のデータとの関係」という分類を設け、利用に不便のないかたちに整えられた。本研究では、これを仏教經典データとして利用する。

一方、中国学は、四庫全書・四部叢刊など大型のデータベースが構築されているが、いずれも有料であり、校勘の信用性もS A Tに比べると大きく劣る。それでも、仏教經典データを分析する基準とすべきテキストデータは、これらの大型データベースにより用意することが可能であり、その中から分析すべき語彙を抽出して仏教經典を分析する。その際、とくに仏教と道教とが厳しく論争を行った結果生まれた仏教經典に注目し、それを華夷概念・胡漢概念から分析することで、中国における民族概念の成立の研究に及んでいきたい。

仏教と儒教の經典をテキストの相互比較により分析する、という方法論は、これまで用いられたことのない方法論である。さらに、中国人が自らを漢民族・自らの文字を漢字と称するような民族意識がどのように形成されるのか、という問題を解決する手がかりを得ることができる。

具体的には、中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究を実現するため、唐代に道世が著した仏教典籍『法苑珠林』における東晋の干宝の『搜神記』の引用事例を調査することにした。その結果、計量学的研究の前提となる両者の関係を明らかにし得た。

4. 研究成果

中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究を実現するため、対象を選定し、その内容を理解することに努めた。

唐代に道世が著した仏教典籍『法苑珠林』

には、東晉の干宝が著した『搜神記』が、感応縁ばかりでなく、述意部にも引用され、それへの反論が述べられている。これを比較・検討の対象に定めた。

ところが、『搜神記』は、志怪小説とされ、儒教との関わりは十分には解明されていない。そこで、『搜神記』における儒教との関わりを追求するために、干宝の理論を代表する「五気変化論」と、儒教の天人相関説とを比較した。

干宝は、東晉の正統性を支えるような、天人相関説の現れとしての瑞祥と災異と、西晉の滅亡を伝えることができなかつたような、天人相関説とは関わない瑞祥と災異とを弁別することに目的に、後者が発生する原理を解明するため『搜神記』を著した。干宝は、先行する著作の内容を組み合わせることで、自らの論理を構築する。『春秋左氏伝』の「妖災」、『論衡』の「鬼」の生成から、「妖怪」の生成論理を作り上げたのは、その一例である。

「五気変化論」は、そうした干宝の理論を代表するもので、「順常」という正常な変化は四種に分けられ、変化する際の「気」「形」「性」の変容と不変が整理されている。また、「妖」という常ではない変化は、人が「気」の「反」「乱」「賢」により変化することであり、これこそ儒教の天人相関説の中心に置かれるべき変化であった。干宝は『晉紀』総論で示した上帝の二心への疑義を解決するため、『春秋左氏伝』に従って「神道」のあり方を「事」を中心に『搜神記』に記録した。すなわち、『搜神記』は、『春秋左氏伝』が史書としての性格を強めていたことを背景に、史部に著録されていたが、本来は儒教起源の語彙を多く含む著作であった。

一方、唐代に道世が著した仏教典籍『法苑珠林』は、仏教のみならず儒家、道教、讖緯、雜著など400種を超える典籍を引用している。

それらの中でも、東晉の干宝が著した『搜神記』は、『冥祥記』に次いで二番目に引用が多く、また事例集である「感応縁」の部分ばかりでなく、編目の大意を述べた述意部にも引用され、しかも『搜神記』の見解に対する反論が述べられている。

すなわち、道世は、『法苑珠林』において、仏教的宇宙観を展開したが、その対峙性において、最も意識したものが『搜神記』であったのである。それは、『搜神記』が、数多くの変化を記録するだけでなく、それらの原理を追求する「五気変化論」という理論を有していたことによる。『成唯識論』を訳した玄奘の影響を受けた道世は、唯識論により干宝の五気変化論を打破することで、仏教の優位性を明確に示したのである。

これまで、儒・仏・道の三教研究では、仏・道の論争に重点が置かれてきたが、仏教は中国知識人の世界観を根底で規定する儒教の力を看過していたわけではない。干宝の『搜神記』は、劉歆・鄭玄が理論化した気を重視

し、また、そこには京房易などの象数易による予占化した災異思想が含まれていた。このため、道世は、道教に対する反論よりも、『搜神記』に含まれる儒教の中でも最も重要な天人相関説に対して、反論を行ったのである。『法苑珠林』は、融和的な著作ではなく、儒教と真っ向から対峙した著作なのである。

したがって、両者を比較・検討することにより、中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究が可能になるのではないかと。

西晉「儒教国家」の崩壊と東晉以降の仏教受容の本格化により、儒教は危機を迎え、儒教的世界観の根底にあった天人相関説が揺らいでいく。やがて宋学によって、天人相関説は名目化されていくが、そうした儒教の変容において、仏教の与えた影響の大きさについては、本研究の成果で示した方法論によって解決の方向性が見えてくるであろう。

本研究の成果は論文化され、東京大学東洋文化研究所の紀要に、渡邊義浩「『搜神記』の執筆目的と五気変化論（『東洋文化研究所紀要』168, 2015年12月, 1~31頁）」として発表した。その一方で、中国仏教經典に占める儒教起源語彙の計量学的研究を継続しており、その成果は、「『搜神記』の引用からみた『法苑珠林』の特徴」として完成した。これは、2016年度中に、大東文化大学東洋研究所の紀要『東洋研究』に発表される予定である。

さらに、中華と夷狄により表現させていた自民族と他民族を分ける表現が、胡と漢により表現されるに至る過程を分析することは、中国史・中国思想の枠組みを揺るがず問題を提起する。儒教を起源とする華夷思想は、別名を中華思想と呼ぶように、中華が君であり文化の中心であって、夷狄は臣であり文によって化せられる対象とするものであった。これに対して、胡と漢という民族意識は、たとえば、隋唐帝国が胡漢融合政権と称されるように、胡と漢との間に文化の上下や君臣関係を含むことはない。五胡十六国を形成した五胡の君主たちが、仏教を尊重したように、胡族は漢族に対抗する文化的価値として仏教を宣揚し、北魏や隋唐は国家的事業として仏教を保護した。

胡という民族概念が、こうした背景を持つがゆえに、仏教という高度な文化を持つがゆえに、漢という民族概念に劣ることのない概念として意識されたとすれば、それがいつから、どのように生まれ、受容されたのかを追求することは、中国における仏教の受容の本格化と関わる重要な問題となる。それは、同時に、漢族が仏教をいかに認識し、胡由来の文化を自らの文化とどのようにすり合わせたのか、という問題につながるものであり、仏教の受容に伴う、儒教の対応を解明していくことにもなる。たとえば、宋の朱子学の源流の一つとなる唐の韓愈が仏教を厳しく拒絶したことは、漢族が自らを認識していく際に、仏教を乗り越えるべき大きな文化と考

えていたことを端的に物語る。そうした仏教認識の始まりとなる東晉時代の民族概念の成立を探ることは、仏教の受容だけではなく、儒教の展開を考えるうえでも、重要なテーマなのである。これも本研究で明らかになった新しい問題である。

そのほか、これと関連して多くの論文・著書を執筆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

1. 渡邊義浩「干宝『捜神記』の孫呉観と蒋侯神信仰」(『中国文化 - 研究と教育』査読有, 73, 2015年6月, 14~26頁)

2. 渡邊義浩「『古典中国』の成立と展開」(『中国史の時代区分の現在』査読無, 汲古書院, 2015年8月, 137~144頁)

3. 渡邊義浩「後漢の羌・鮮卑政策と董卓」(『三国志研究』査読有, 10, 2015年9月, 1~15頁, 『三国志よりみた邪馬台国』に収録)

4. 渡邊義浩「古代中国における「文」の概念の展開」(『日本「文」学史』査読無, 第一冊, 勉誠出版, 2015年9月, 41~68頁)

5. 渡邊義浩「後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹」(『RILASJOURNAL』査読有, 3, 2015年10月, 右1~11頁, 『三国志よりみた邪馬台国』に収録)

6. 渡邊義浩「干宝の『捜神記』と五行志」(『東洋研究』査読有, 197, 2015年11月, 27~50頁)

7. 渡邊義浩「『捜神記』の執筆目的と五気変化論」(『東洋文化研究所紀要』査読有, 168, 2015年12月, 1~31頁)

8. 渡邊義浩「曹魏の異民族政策」(『史滴』37, 2015年12月, 131~145頁, 査読有, 『三国志よりみた邪馬台国』に収録)

9. 渡邊義浩「『漢書』における『尚書』の継承」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』査読有, 61-1, 2016年3月, 3~17頁)

10. 渡邊義浩「中国の津田左右吉評価と日中の異別化」(『津田左右吉とアジアの人文』査読無, 2, 2016年3月, 46~52頁)

11. 渡邊義浩「何晏『論語集解』の特徴」(『東洋の思想と宗教』査読無, 33, 2016年3月, 27~44頁)

12. 渡邊義浩「『世説新語』における人物評

語の展開」(『六朝学術学会報』査読有, 17, 2016年3月, 19~33頁)

[学会発表](計5件)

1. 渡邊義浩「鄭玄経学与西高穴一号墓」(第七届中日学者中国古代史論壇、北京、2015年8月)

2. 渡邊義浩「何晏『論語集解』の特徴」(清華大学・早稲田大学第一屆國際學術研討会、北京、2015年10月)

3. 渡邊義浩「『捜神記』の引用からみた『法苑珠林』の特徴」(第七回東アジア人文学フォーラム、台北、2015年12月)

4. 渡邊義浩「中国貴族制と文化資本論の射程」(第八回日中学者中国古代史論壇、東京、2016年5月)

5. 渡邊義浩「中国古代儒教」(日本儒教会創立大会、2016年5月)

[図書](計12件)

1. 渡邊義浩『「古典中国」における文学と儒教』(汲古書院, 2015年4月, 335頁)

2. 渡邊義浩〔主編〕『全譯後漢書』志(八)輿服(汲古書院, 2015年4月, 166頁)

3. 渡邊義浩〔編〕『中国史の時代区分の現在』(汲古書院, 2015年8月, 462頁)

4. 渡邊義浩〔主編〕『全譯後漢書』列傳(七)(汲古書院, 2015年8月, 908頁)

5. 渡邊義浩〔主編〕『全譯後漢書』志(四)天文(汲古書院, 2015年12月, 140頁)

6. 渡邊義浩『英雄たちの「志」 三国志の魅力』(汲古書院, 2015年4月, 216頁)

7. 渡邊義浩『三国志 英雄たちと文学』(人文書院, 2015年7月, 213頁)

8. 渡邊義浩『一冊でまるごとわかる三国志』(大和書房, 2016年1月, 286頁)

9. 渡邊義浩『三国志 運命の十二大決戦』(祥伝社, 2016年3月, 283頁)

10. 渡邊義浩『三国志 DVD&データファイル』1~12(講談社, 2015年10月~2016年3月, 各51頁)

11. 渡邊義浩『春秋戦国 500年の興亡』(洋泉社, 2015年11月, 127頁)

12. 渡邊義浩『すぐわかる三国志』(柘出版

社，2016年3月，96頁)

6．研究組織

(1)研究代表者

渡邊 義浩 (WATANABE Yoshihiro)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：40241400